宇宙の港町の雑踏の中で^{*1}

——第 37 回 IAF 大会——

長 友 信 人^{*2}

Key Words: IAF, IAA, Society Activities

1. はじめに

第 37 回 IAF 大会は 1986 年 10 月 4 日から 11 日までオーストリアのインスブルックで開催された。オーストリアでの開催は 1972 年のウィーン以来 14 年ぶりである。たまたま筆者はウィーンでの大会ではじめて IAF に接したが¹⁾、記録によると 1954 年に第 5 回の IAF 大会がここインスブルックで開かれている。このたびのインスブルックの会議と比べて IAF とそれを取りまく宇宙の世界の移り変りをふり返らずにはいられなかった。

2. 各種委員会

第 37 回大会の最も大きな特徴は IAF と IAA のビジネススケジュールがすっかり改められたことであろう。

IAF にはテクニカル委員会が常設されていて、IAF 大会中に委員会ごとに会合が開かれて、次の IAF 大会におけるテクニカル・セッションの構成が検討されコーディネータと座長の候補が選出される。これも 14 年前は「技術専門委員会」という趣きがあったが、東京大会以後、多分ブダペストの大会の頃に、各委員

会の役割はその次の大会のプログラムを準備することであるということを決められた。しかも、各委員の任期は 2 年であるというような条件がつけられ、順番にやりましょうというスタイルに落ち着いた。

IAA の委員会の方も同じように組織され、IAA の分担するプログラムについて企画することになっている。

さてこの IAF と IAA の委員会は従来 IAF 大会の会期中にテクニカルセッション等の主イベントと並行して行われたのであるが、今回から事前に土・日の間に 1 回目の会合を開いておくことになった。というわけで、人によっては金曜日には到着して土曜日の委員会に出なければならなくなったのである。

私は案内状のとおりに出ようとするに 10 月 4 日(土)の午後 1 番のプログラム委員会から出なければならぬのに、これはまあいいでしょうとその会議をやっている頃に空港に着くチロリアン航空で到着した。同便で宇宙研の野村先生や東工大の梅谷先生ら多数おいである。空港から滑走路の長さの 3 倍くらいの距離の「街」までタクシーやバスに分乗して乗り入れるという感じで、14 年前のウィーンで三菱電機の土屋和雄氏とアメリカから来ていた草薙道郎氏に会場で初対面をして、それが日本の全参加者であったことを考えると感無量である。

その日はもう一つ委員会があるので会場に行く。会場は三つに分かれているが、メイン会場はコングレスハウスである。例によっていかめしい顔をした玄関番に迎えられて登録を済ませ、今回の IAF 大会のロゴを焼き付けて ESA のステッカーを貼ったハードなカバンをもらってうれしくなる。郵便受けのビジョンボックスもそろっていてこれまた満足した気分になる。見たような面々が早々と来ていて「やあやあ」となる。皆、真面目に出席している。

委員会の開かれる部屋は当地チロル地方の名前がついていて、「教育」の委員会はイムスト (Imst) で開かれるとのこと、少し早いので誰もいないが、しだい

著者紹介

長友 信人 (正会員)

昭和 12 年生。昭和 35 年東京大学工学部航空学科卒業。昭和 42 年工学博士。昭和 40 年東京大学宇宙航空研究所助手。昭和 56 年宇宙科学研究所に配置換え。同年 7 月教授。現在に至る。宇宙推進と飛翔体の研究および宇宙の開発をテーマとする。国際宇宙航空学連盟各種委員会委員。

^{*1} 昭和 62 年 1 月 28 日原稿受理 Growing Crowds Heading for Space Frontier: The 37th IAF Congress in Innsbruck, Austria

^{*2} 宇宙科学研究所 Makoto NAGATOMO

第1図 会場を示す地図 (第37回 IAF 大会プログラムの表紙裏より引用)
①が主会場のコンgres・ハウス, ⑧が市公会堂, ⑭がライフアイ
ゼン会館。

第2図 市公会堂前から主会場の方を望む
左側は宮殿でその向う側に会場がある。後の山は
ケーブルカーとロープウェイを乗りついで登れる
ハーフェレカル山。

にやってきていて、時間になるとログスドン (Logsdon) 委員長以下だいたいそろった。表向きはたんと進んでいるが、この委員会は小委員会をもっている、ということはいまうまくとまっていけないということでもある。委員の任期をめぐる厳密にやろうという

委員長とあまり乗り気でない委員達のやりとりがある。詳しいことは省略。こういう委員会では、あまりよくわからないというような顔をしている私や中国の代表がむしろ委員会の尊厳を保つのに貢献しているというべきか？ 最後に SYRE (Safety of Youth Rocket Experiment の略) の小委員会が翌日の昼に集まることを約して解散した。

タイミングよく、到着祝いをする日本のメンバーがそろったので皆で乾杯などをして初日は終わった。

翌日は早速朝 9 時 20 分から「推進と動力」委員会が開かれるので早くから出かけていく。まず、今回のシンポジウムの座長の報告である。私は「宇宙動力の応用」セッションの座長をアメリカのマリン氏 (Mullin) とつとめることになっていたが、来たのは私一人である。仕方がないので何とかごまかして「いったい奴さんはどこにいるんだろう？」と思っていたが、日曜の朝から出席できるのは大学の教授ぐらいに思っているらしい。ともかく一通り終わったところに IAF の役員のところから「推進と動力」の委員会を「推進」と「動力」の二つに委員会を分けることを勧告するという

使いがきた。前からどうもこの委員会の中もしっくりいかなくて、メンバーは重複しているために、プログラムを作るといってガミガミしていたので見かねた外からの圧力がかけられたのであろうと思うのだが、細かいいきさつはわからない。「知らぬが仏」というものであろう。とにかく私は「動力」のほうに入って太陽発電衛星への道を開くことにする。

このあとは「宇宙ステーション」委員会なのだが、昼食をとった後、ちょっと暇がある。IAF のスケジュールをざっとながめてみると暇な時間はこの2時間くらいである。何とかもどってこれるだろうと裏山にケーブルとロープウェイにのり出かけていったが、案の定1時間もおくれってしまった。もどって来たら、NASDAQ の斉藤勝利氏が出席しているので安心した。退官した NASA のフライターク氏 (Freitag) が現役のカーライル氏 (Carlisle) と委員長を交代したらしく、いちだんと真面目な雰囲気である。この委員会は昔から顔ぶれが変わっていない。当然、なるべき人間達がそろったという面々である。それであとはすぐに終わってしまって何をやったかさっぱり覚えていない。まったく無責任である。

IAF には約 25 の委員会があって、それぞれの人のつながりをもとにして、個性のある委員会ができていく。私のように三つも四つも委員をやっていると、いろいろな委員会のカラーが読みとれるのが利点だが、そのためにはかなりの義務をはたさなければならない。

3. 開 会 式

開会式はいつもわくわくした気持ちになっていた。また、日本ロケット協会の「ロケットニュース」の編集者兼カメラマンであった頃は大変忙しくもあった。しかし、今回はわくわくもしなければ忙しくもない。カメラをもつ必要がないせいもあるが、たぶんその前に2日も委員会があったので、初めて出会う人の数が少ないのが大きな理由ではないだろうか？

開会式の鳴り物は、まず会場のコンGRESSハウスの入口でチロルのバンドの演奏があって、会場では合唱団がヨーデルをまじえて時間まで歌ってくれる。

最初は主催団体であるオーストリア太陽・宇宙局のオルトナー局長 (Ortner) の挨拶である。オルトナーはいつも「動力」委員会の仲間であり、1982 年のウィーンでの UNISPACE (国連宇宙会議) でもいっしょに「太陽発電衛星」のセッションをやったりしたので、何となく身内のような気がして仕方がない。もちろんこれはご本人の穏健な人柄によるものであって私がとくに親しい関係にあるわけではない。とにかく挨拶のな

第3図 第37回 IAF 大会用のロゴ
主題は SPACE: New Opportunities for All People である。

かで、皆様のお蔭でこの会議が開けるようになったという言葉の裏にはとくにチロル地方の人々への感謝の気持ちがよくでていた。そういえば、来賓挨拶には、インスブルック市長、チロル知事が入っていた。

それに続いて IAF グレイ会長らが挨拶をして最後にもう一回合唱団が歌をうたって開会式は終了した。

招待講演はロイ・ギブソン氏 (Roy Gibson) が講師である。ギブソンといえはわずと知れた ESA の初代総長で、現在の ESA の基礎がためをした人である。その行政の手腕がかわれてか IAF の会長時代はその財政危機をらつ腕でのり切ったというので有名である。そして、現在は懸案の英国政府の宇宙機関である「国家宇宙センター」の初代所長をして、祖国のためにつくしている。それにしてもずいぶん古顔を出してきたものだというのが私の素直な印象であったが、「宇宙：全ての人々への新しい機会」というテーマを先に与えられれば、これについて話せるのはそうやたらないはない。なるほど、こんな話ができるのは彼だけだ、とふと洩らしたら「まったくそうだね」と誰かが合槌をうった。話の中味はもちろんおぼえていない。

ついでであるが、ギブソンは今大会のプログラム委員長である。毎朝その日の講演者全員を集めて行われるブリーフィングでは自ら大声をはりあげて注意事項を伝え、各セッションにとびまわっては、座長に確認して歩くぐらい元気のよい委員長ぶりであった。日本だったらさしずめ NASDA の元理事長が朝早くからシンポジウムの用意ができているかどうかを見て歩くということである。まったく考えられない。しかし、いろいろと理由があってやっているらしいとあとになって気がついた。

テーマセッションはオルトナーが座長をやって西独のフィンケ (Finke)、オーストリアのヤンコビッチ (Jankwitsch)、アメリカのペイン (Paine)、ソ連のコテルニコフ (Kotelnikov) そしてアメリカのハイス (Heiss) の5氏がパネリストとして登録されていた。皆偉い人ばかりであるので期待していた。

フィンケは西独の前科学技術大臣でいわば西欧代表としての意見をのべた。ヤンコビッチはオーストリア

が今度 ESA の正式メンバーになるということが話の主旨で、ようやく私は今回の IAF の舞台まわしの裏が読めたのだった。ヤンコピッチは 82 年のユニスペースでは NGO (Nongovernment Organization) の会議やわれわれのセッションにも出席していたが、いまはワルトハイム政権の外務大臣である。帰国後すぐに日本の新聞に彼の訪日記事があり、外務大臣らしい発言をしていて感心したが、世界の中核では、宇宙も外交のサロンなのである。かつて私にこのサロンをかい間見せてくれたのは中川学一ツ橋大学教授であった。そのとき町でばったり出会ったワルトハイムと握手をしたことを覚えている。

アメリカのペインはもちろんペイン委員会のトーマス・ペイン元 NASA 長官であるが、欠席のため代理のワシントンのスミス女史 (Smith) がカラースライドを使ってペイン報告を要約して発表した。チャレンジャー事故の「悲しみをのりこえて」アメリカは何をいうのかなという事前の懸念があったが、「可愛らしい」(某氏による) 女性ができばきと未来を語って、皆うっとり聞いていたというのが、その場の印象であった。ところでこの美女とは夜おそくまでビジネスで顔を合わせるはめになるのだが、そのときは夢想だにできなかった。

インターコスモスのコテルニコフ総裁は東欧代表といったところだろうが、話は国際協力で多くの国にチャンスを与えているという、この IAF 大会のテーマにぴったりの話であった。

ハイスは確かオーストリア出身で法律家か財政関係の専門家である。以前、5 機目のスペースシャトルを民間が保有するということが話題になったときにスペースレストラン社を設立して必要な建造資金を提供するという運動をおこした人でもある。宇宙における民活について話をしたようであったがどうもこの手の話はわれわれにはむづかしい。

4. 学術セッション

学術セッションは日曜の午後から金曜日の午後まで 7 セッション並行で、大部分のセッションが半日の長さで合計 63 セッション。テーマごとにセッション数を列記すると、宇宙システム (4)、ステーション (4)、地球観測 (4)、輸送 (4)、エネルギー・動力・推進 (7)、材料・構造 (2)、飛行力学 (4)、マイクロ G (4)、宇宙探検 (4)、通信 (3)、教育 (2)、ライフ (4)、地球変化 (1)、安全・救難 (2)、経済性 (3)、将来システム (1)、CETI (2)、歴史 (1)、再び月へ (1)、学生 (2)、宇宙法 (4) である。ここではセッション分野名は略している。

第4図 第2図と同じ通り前方(北)から会場を見たスケッチ
主会場のレストランのメニューより切り抜いたもの。そのレストランはのろくて間違いが多いことで評判だった (撮影: 中村円生)。

さて、私にとっての大問題はこの学術セッションといかにつき合うかである。私は「ステーション」と「エネルギー・動力・推進」でそれぞれ座長をやって、「輸送」でペーパーを一つ発表した。委員会のつき合いで出なくてはいけないセッションもいくつかある。こういうことを考えて予定を立ててみるとまず半分くらいがふさがってしまって、のこりのあいたところにまた委員会が入ってくる。そういうわけで IAF 大会では会費を払った分だけ聞いてやろうという計算がまったく成り立たない。まさに参加登録料となってしまう。

ともかく、そのセッションのなかから二つ三つふん囲気だけをお伝えする。その一つは「宇宙ステーション-学際的検討セッション」で、NASA を退官したフライタークと私が座長になり、ESA のボルトン (Bolton) がラポチャーになる。このセッションは知見・経験・知名度ともに私より一世代くらい長じているフライタークが昨年いい出したもので、はじめは本人も何をやらたいか見当がつかなかったらしいふしがある。そのうちに、セッション名もこのように変えて IAF の委員会全部に呼びかけて宇宙ステーションをいかに考えるかという課題で話してもらうことになったが、これには ESA のモリーとも相談したらしい。まあ、どっちにしても IAF の委員長をまとめて引っぱり出すという私には考えもつかないアイディアであった。

登場したのは「マイクロ G」、「探検」、「地球観測」、「ライフ」、「材料・構造」、「通信」、「エネルギー・推進」、「安全・救難」の委員会の主として委員長達で、好き勝手なことをしゃべっているようであるが、一通りきくと何か一貫した筋が通っているようでもある。フライタークは「対話ができれば十分だ」といってしめくくる。IAF のなかでもユニークなセッションで

あったろう。フライタークは最終日の晩さん会で宇宙の国際協力に貢献したことでエミール賞を授与された。宇宙ステーション計画のはじめからずいぶんわれわれにも親切にしてくれたことを思い出した。

もう一つは、マリノと一緒に座長をした「宇宙エネルギーと動力シンポジウム」の応用セッションである。昨年座長を無断欠席したフランスのデュパ(Dupas)が今度はラポチャーで出席している。6月にもパリで会っているせいはいつになく愛想がよく、こちらも悪い気がしない。

NASAのブランドホースト(Brandhorst)はルイス研究センターの活動を中心にこくのあるサーベイをする。アメリカのダハティ(Dougherty)は次の10年間の電源について話した。アシュ(Ash)は火星サンプルリタンの電源の問題についての研究を紹介、火星の大気からメタンと酸素を作って、液体水素をもっていなくてもよいというような内容である。オーストリアのカップ(Cap)は静電型発電機のメリットについて話した。チェコスロバキアのポスピシル(Pospisil)は白板を使って身振り、手振りの大演説で月の周辺にSPSをおく計画を説明したが、「電波天文学者に一言いってみろ、大変だぞ」という場内からのコメントに目を白黒させて反論してやんやの喝さいをあびていた。IAFならではである。グレーザー(Glaser)は宇宙用の発電衛星の必要性について説いた。衛星の軌道はどうやって保持するのか？という質問に対して、「これは電力衛星だ。パワーはいくらでもあるから何でもできる」といつもながら自信に満ちていた。

学術セッションの行われる会場は、主会場のコンgresセンターのほか、シュタットザール(市公会堂?)とライフアイゼン会館の二つに分かれており、歩いていける距離であるとはいえ、歩きまわっているとけっこうたびれるし、さもないと途中で道の草をくってしまったら、まあ、天気がよかったのが幸いだった。

5. 各種行事(カレントイベント)

今年のカレントイベントは月曜から金曜まで毎夕行われ、出し物は「ハレー」、「STS」、「ミール」、「スポット」、「D-1」であった。

ハレー探査は、日本のISAS、アメリカのNASA、ソ連のインターズプートニク、ESAがそれぞれ成功し終わってホッとしたような気分で成果を発表し合った。「さきがけ」と「すいせい」について講演した野村民也教授が最初のスピーカーであった。NASAはエーデルソン(Edelson)がかき集めてきた話題を話したが、まるで何でもアメリカがやったといわぬばかり

第5図 ソ連の展示場のパネルに描かれていたハレー彗星の形状と寸法図
ESAの作ったハレー彗星の模型もあってあったが、このほうが写真うつりが良かったので…(撮影：中村円生)。

の話には微苦笑がもれた。ソ連のベガの話はいつになく英語のうまい西欧的な(?)科学者が出てきて時間がたつのも平気でコンピュータで処理したハレー彗星の画像をビデオで見せて皆をうならせた。ピーナッツのような奇妙な形をした天体がくるくるまわっているのを見たときは、ソ連もなかなかやるじゃないかと思ったものである。某氏の曰く「あれはこちらにきてから作らせたに違いない。前にはなかった」と。たしかにジョットの画像も迫力はあるのだがいま一つ光が写っているけれど像がはっきりしていないのが残念であった。

STSはチャレンジャー事故のあと、どのように航行再開の準備が進んでいるのかの説明され、再開は1988年2月18日と発表された。これはNASAが新会計年度のはじめ(10月)に行うといっていたニュース発表をIAFでくり返したもので、予想外のことはなかった。

ソ連の「ミール」宇宙ステーションの発表はいつものとおり壇上に偉い人達がずらっと並んで通訳つきで行われたが、これと同時に映画が上映されて、ミールの全容がはじめて明らかにされた。その大きさはサリュートとたいして変わらないが、ミールはミッション部を専用のモジュールにして四つのドッキングポートに取り付けられるものになっているので、内部の構成が居住と共通設備にあてられ居住性が大幅に改善されている。外部は大きな太陽電池パネルが特徴で40m²で10kWの電力供給ができる。ミッションはアストロモジュールからはじまり、5年で4個というから

1990年代はじめ頃までに完成する。サリュート7号の成果についても説明され、本体50トン、運んだ荷物45トン、170種の実験をして持ち帰ったサンプルは500kgにのぼっている。このなかには18,000枚の写真も含まれている。国際協力の面では11人の外国人が参加した。ミールとサリュート6号の間をソユーズ宇宙船で往復した話も紹介され、このときマンピュレータが使われたことなどが明らかにされた。説明もいつになく豊富で好評であった。

フランスのSPOT衛星のイベントは残念ながら見逃した。また、最終日のD-1(ドイツのスペースラブミッション)のイベントは遅れていったために後半のMBB提供の部分だけで、ヘルメスなどの有翼ロケットをめぐる欧州内の激しいやりとりを少し聞きかじることができたが、いいたい放題で、いささか感情的なところが気になった。

6. 展 示 場

主会場には展示場が付属していて、各国が展示品をおき、大部分のところに店番の人がいて賑わっていた。NASDAが今年も中央部の良い場所に大きなスペースをとってH-IIとスペースステーションを中心にふん囲気を盛り上げていた。ここに一般市民から子供達までやってきて、展示品についての質問をしたり、ステッカーをくれといたりするが、それだけではなく、ここに日本人をたずねてくる外国人が多く、また、討論をしにやってくる専門家もいるので、たんなる展示場以上の役割をはたしている。つまり、これも学術セッションに劣らぬ研究情報交換の場になっているということである。

日本の参加者にとっては何かと連絡に使わせてもらったりして大変ありがたい存在であるが、現地の人達との友好のためにも重要な役割をはたしている。街の通りを歩いていたら、「日本から来た人ですか?」と

たずねられた。たぶんこちらに長く住んでいる日本人だったのであろう。「コンgressセンタに行く」と展示物があって、そこに日本のコーナーがあるから行くといいですよ」といったら喜んでいて、少しいいことをした気分であった。

7. 関 連 会 合

7.1 PISSTA (Pacific Basin International Symposium on Advances in Space Science Technology and its Applications) 最近IAFで皆が集まるからそのときに打ち合わせよう、というケースがふえてきた。1987年に北京で開催されるPISSTAの打合せもその一つである。第2回アナウンスメントを確定するために、具体的な日取りや会費の払込み方法などを主催者のCSA(中国宇航学会 Chinese Society for Astronautics)の案に沿って、AAS(American Astronautical Society)とJRS(Japanese Rocket Society)の代表が見直すことになっていた。JRSは山中龍夫氏の名代、狼嘉彰氏が代表となったが、私にも手伝えというので、中国料理につられて出席したところ、AAS側はペイン報告を代読したスミス女史がペイナム教授(Bainum)とともにあらわれてびっくりした。なんでもAAS会長だそうである。中国側はレン(任新民)、ヤン(楊嘉墀)両教授ら4人がずらりとテーブルの向うにせいぞろいして作業がはじまり、英語の表現のなおし、版權の問題、原稿の締切りと登録料の払い込みと中止のときはらい戻し、タクシーの乗り方まで延々と空腹をおさえての作業であった。10時すぎにどうやら終わってやっとご馳走にありついた。

そのあとの仕上げは翌日の昼食間にまた小一時間を使ってようやく終わり、かくて美人二人とともにまったく味気ないビジネスタイムをもったというしだいである。

7.2 宇宙のエッフェル塔 前からIAF大会に来ると「太陽光帆走レース」の仲間がいて何かと企画しては誘ってくるので、今日も覚悟して何かあったら三浦公亮教授にお願いするという段取りでやってきたら、いささか様子が違っている。いつも真先きにやってくるピニョレ(Pignolet)に「今回は何を?」ときくと、「残念ながらスポンサーの都合で先にやるので、それを先に…」という。それが「宇宙のエッフェル塔」計画の審査委員である。秋葉録二郎教授から何か委員をたのまれているから、私が代りにやってくれといわれたのを思い出した。それと同じらしいが私は何もきいていない。ただ、だいたい前にエッフェル塔の横をアリアンロケットが上っていく絵の

第6図 展示場の宇宙ステーション (撮影: 中村円生)

パンフレットが一つだけ送られてきて「不思議なものなりや」と思っていたが、そのあとの連絡はまるでない。ピニョレにしてみれば、「オレとお前のつき合いじゃないか？」というくらいにしか考えていないらしいが、こっちは「太陽光帆走」でいきおい込んだのに宇宙のエッフェル塔とは何だといいたくなる。少々へそを曲げていたが秋葉先生も、まあやれというし、あれよあれよという間に厚さ10センチもあろうかという書類の束が渡されて「あさっての午前中の委員会までに読んでおいてくれ」という伝言がきたので、ずるずると引き受けてしまった。

ことの起りは、1986年がエッフェル塔の設計を募集して100周年にあたるということにはじまる。これを記念して、宇宙に肉眼でみえて、文化的なものを作るアイデアを募集する。そして、そのなかの一つをエッフェル塔の建築100周年の1989年にアリアンロケットで実現するというのである。その設計募集に応募したのが90余編、そのうち20編を事務局で一次選考したとのこと。それが手渡された分である。早速、学術セッションを聞きながらそれも読める場所をさがして目を通しはじめたが、英語で書いてあるのはたったの3編くらいしかなく、あとは仏・独語である。はじめは困ったが考えてみればどうせ1ページ10秒もかけていられない分量であるからどんどん「読めてしまう」のである。

二次選考をわれわれを含む審査委員会でやってもらいたいということで、入賞3編は1万ECU(約1万ド

ル)の賞金が出て、佳作も数編選んでくれという。紙面の都合であとは省略するが、審査委員のなかにPISSTAの中国側の窓口をやったリー・フォン女史(Li Fong)が入っていたことだけは記しておかねばならない。われわれ2人はPISSTAのお蔭でエッフェル塔協会による晩さん会に出席できず、オモチャのエッフェル塔だけを記念にもらったからである。まあ一口にいて、フランス人というのはスケールの違うことをする連中である。

さて、ピニョレは月レースの担当、太陽光帆走全般はペレット(Perret)が責任者だということで、三浦教授らとともにとりあえず昼飯でも一緒に意見交換をした。しばらくたったらまた月レースを考えよう。それまでは各国でレース艇の設計をしたり、ルールでも考えようという線に落ち着いた。

8. 催 し 物

今回のIAFの特徴は、委員会を前の週と月曜に移したほか、会期中の日中にツアーなどいっぱい入れずに、その代り土曜日をあけたことである。一般に財政緊縮のためにフリーのテクニカルツアーはなくなりつつあり、今回もツアーはすべて有料であった。初日のレセプションは人がガヤガヤしていると思ったらもうおひらきで、実にあっけなかった。これは14年前のウィーンにはかなわない。ラットハウスで飲み放題のワインがあつて音楽付きという時代であった。こんなに飲んで大丈夫かと思うような状態になっても翌日は平気だったので、ヨーロッパのワインはいくら飲んでも大丈夫なのだと信じたのを思い出す。

14年前といえば、当時アメリカの代表団の中に入っていた草薙道郎氏が「今夜はアメリカ大使館でパーティがあるから」といってうらやましがらせたが、最近では日本代表団もNASDAの幹事役でパーティをや

第7図 「宇宙のエッフェル塔」テーマ募集要領の表紙に使われた写真

第8図 チロル地方の木こりの演技(?)を見守る「チロルの夕べ」の参加者達(撮影:中村円生)

るようになったのは喜ばしい。国内では会えない人と、ここでじっくり話ができることもある。まったく、隔世の感があるとはこのことだろう。

さて、チロルは有名な観光地ゆえ、「チロルの夕べ」ぐらいは味わっておかなければならないと参加した。予想より悪くもなければ良くもなかった。私もだいぶすれてきたということだろうか？ 最後の授賞パーティは懐の都合で出なかったが、やっぱり無理をしても出るべきだったかなとも思っている。

9. 総会本会議

さて、最後になってしまったが、IAF 総会本会議についてふれておこう。

日本のIAFメンバーは、協会メンバーの日本ロケット協会と日本宇宙飛行協会そしてインスティテュションメンバーの経団連・宇宙開発推進会議の三つである。二つの協会のうち日本ロケット協会が投票権をもっている都合上、首席代表と代理2名を登録している。今年は航技研の狼嘉彰氏が首席で、宇宙研の上杉邦憲氏とNASDAの岩田勉氏が代表代理に指名されていた。私は昨年までは気になっていたのぞきこんだが、今年はまったくごぶさたしてしまった。そういうわけで以下は狼氏の報告のくり返しである。

本会議は例年どおり、初日月曜日の午後第1日が開かれ、金曜日の午後にしめくくりの第2回が開催された。

まず、今回は会長の交代の年で、デンマーク、フランス、スイス、米、ソ連の5カ国から成る指名委員会が設けられて人事選考を行った結果、今回のホスト役であるオルトナーが会長に指名され総会で承認された。なるほどギブソンが一所懸命に働いていたのはそういうわけだったのかと一人で納得したしだいである。

次回第38回IAF大会の開催地は、前回の内定どおり英国のブライトンに決定した。これによってギブソンは引き続いてプログラム委員長をやり、ソ連のリヤザンチェフ氏(Ryazantsev)もこれにつき合い前回同様ということになった。主テーマは「30 years Progress in Space」で、期間は10月10～16日。このペーパー募集はすでに昨年12月に各国メンバー協会・組織および委員に発送されている。

参考までに第39回以降の開催予定地を紹介しておこう。

- 第39回(1988) インド・バンガロー
- 第40回(1989) 中国・北京
- 第41回(1990) 東ドイツ・ドレスデン
- 第42回(1991) カナダ・オタワ

第43回(1992) 米国・ワシントン, D.C.

第44回(1993) ユーゴスラビア・ベオグラード

このうち1992年の米国のISY(International Space Year)とリンクすることになっている。

各種委員会のほうは、すでに述べた「宇宙動力」と「推進」が分離したほかは、「パイオアストロノーティクス」が「宇宙ステーション」に吸収されただけで大きな変動はないとのことである。

10. おわりに

いつものとおりIAF大会は宇宙へのり出す船乗り達が集まる港町のようなものである。この気持ちははじめて私が出席した1973年の第23回IAF大会以来変わっていない。以後7回参加したことになるが、しだいにIAFそのものは変わってきた。一口にいうといい加減なところがなくなってきた。たとえば1972年の大会に私は宇宙研の映画を事務局に持ち込んで、カレントイベントで映写してくれといったのんでおいたら、夕方遊びに行っている間に上映されて、あとから皆に感想をいわれて、キョトンとしていた。こんなことはいまはとてもできそうに思えない。それと同時にまた私自身のその港町とのかかわり合いは少しずつ変化した。はじめの頃は港町全体が見えていたが、だんだんその雑踏の中にまぎれ込んで町全体のことはどうでもよくなってきたようにも思える。日本からの参加者がふえてどこかにはまり込んでいるという安心感もあるのかもしれない。そういう皆さんは早くも雑踏の中を歩いて楽しんでおられるようだ。しかし、IAFに来ていない有力メンバーも世界にはたくさんいる。IAF以外での仲間うちのつき合いも大切である。それでこそいっそうIAFが楽しくなる。「学問とは真理をめぐる人間関係である」という私の思い込みはますます強くなる一方である。

文中に出てくる人の名前は正確でないかもしれない。また敬称を略している場合もあるが、この点もお見逃しいただきたい。

狼嘉彰氏には正確な資料を提供していただくとともに、この原稿を書くようにすすめられた。中村円生氏には写真を提供していただいた。また、私がこの会議に出席できたのは日立製作所のご好意に負うところが大きい。皆様方に厚く感謝する。

参考文献

- 1) 長友信人：第23回IAF総会，日本航空宇宙学会誌，21(1973)，pp. 440-445.